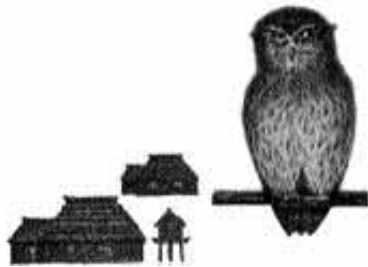


アイヌ民族博物館 北海道白老町若草町2丁目3番4号

コタンメール

第6号 2002. 11. 10発行



チプサンケおごそかに

ポロト湖畔で 新しい丸木舟の進水式



色づいた木の葉がうつり、静まりかえった湖面を、へさきにイナウを立てた新しい丸木舟がすべっていきます。

男子がかいをあやつり、女子が座っています。まるで時代がさかのぼって、アイヌが「美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた」（知里幸恵『アイヌ新謡集』序文）頃の姿をまのあたりにする風景です。

その時、舟のへさきの向こうに、一羽の白鳥の姿が見えました。白鳥は舟が向かっていっても驚かず、近寄ってくるようにも見えました。思わずカムイだとつぶやいたほどでした。

去る10月19日（土）、ポロト湖畔で行われたチプ・サンケ（舟・おろし）のでできごとでした。

チプサンケは10時ごろから、ポロチセでの祈りで始まりました。祭主は新井田伝承課長。課員が力をあわせて作り上げることができたことへの感

謝と舟の安全を願います。そのあと、湖畔のトーココカムイ（湖の神様）のヌサ（祭壇）の前で、舟を湖水に浮かべて使いますからお守りくださいというお祈りをして、舟をおろしました。

生活のいろいろな場面でカムイに祈りをささげるのは、人間は自然の恵みの中で生きているのだということを知っていたからです。

じっさい、サケ、マス、シカなどの動物性タンパク質、ウバユリ、ワラビ、山ウドなど山菜からのでんぷん質やビタミンなど、全てが自然から手に入れることができましたから、もし、自然がなくなったらどうなるかをよく知っていたのです。

今のわたしたちはともすれば、「あたりまえ」と思いがちで、人が限られた資源で生きていることを忘れ、たいへんなあやまちを犯しがちです。

祈りは、自然の大切さを心にきざみこむ大切な意味があったのではないかと考えながら、チプサンケに参加していました。

シリカフ（メカジキ）送りの儀式

日時 12月13日 9:00～

場所 博物館ポロチセ（見学可）

主催 シリカフ送り儀礼実行委員会

戦後に絶えて久しいシリカフ漁に伴う儀式を、白老の記録資料をもとに復活させます。翌日の白老アイヌ民族文化祭（10:00～コミセン講堂）でオハウ（お汁）にして町民の皆さんにも食べていただく予定です。お楽しみに。





■カナダの先住民族来館

11月8日（金）、9日（土）に静内町で行われた「第15回アイヌ民族文化祭」に海外ゲストとして招かれたカナダ・ブリティッシュコロンビア州コーストセーリッシュに住むカナダ先住民族スコームッシュの一行12名が来館し、アイヌ古式舞踊、博物館展示などを見学し、ポロチセで文化交流を行いました。今回来ていただいた皆さんはスパクワス・スローラムというグルー



プです。ポロチセでは、お互いが伝統芸能を披露しあい、アイヌの伝統料理を食べながらお互いの文化の違い、共通点を発見しながら大変有意義な時間を過ごしました。

スコームッシュには、アイヌのポロチセによく似たロングハウスという集会所のような施設があり、そこで色々な踊りや歌を歌ったり井戸端会議もするそうです。グループの皆さんは、ポロチセをロングハウスのような居心地だと大変喜んでくださいました。そこで急遽、普段同族以外の前では決して公開することのない「神聖な場所を浄める踊り」でポロチセを浄めてくださいました。この他、熊をモチーフにした「ベアードダンス」、鹿踊り「クリニス」など大変ユニークな踊りや歌を披露してくださいました。

このようにアイヌ民族博物館では、アイヌ民族以外にも世界中のあらゆる国に住む先住民族や少数民族の方たちと交流し、相互の歴史・文化の理解と発展をめざしています。

（伊藤栄子）

■学芸員の勉強会が富良野市で

10月24日（木）、富良野市で北海道博物館協会主催の研修会が開催され、館長が出席。テーマは「博物館とエコツーリズム」。エコツーリズムというのは、地域の自然を守るために観光を行い地域を活性化して、その利益の一部で自然を守るというものです。

これに「博物館がどう関わっていくか」が今回の内容ですが、現在白老町を中心として進め

ている「イオル構想」にも深い関係があります。

研修を終えて、博物館も自然環境の保全を基本に教育を行っていますが、やはり今までのように、基礎的に科学的に取り扱うべきではないかと思いました。

さらに、単に人と自然との関わりだけではなく、自然を介した人と人との関わりを考えなければ文化はなりたたないのだという思いを強くしました。

それが「イオル構想」なのだとも。

■編集者の言葉



10月16日（水）にロータリークラブ、25日（金）経済懇話会と、白老町の有識者に話を聞いていただく機会をえましたる前者では、「博物館と観光」、後者では「アイヌ文化とイオル構想」でした。双方自分で選んだ主題ですが、気づいたら、今アイヌ民族博物館に課された問題で、頭の中でぐるぐる渦巻いているのが正直に出てきたわけでした。（中村 齋）

